

青
あおおに
白
鬼
調
査
11

怪物を^{かい}生^{ぶつ}み^う出^だす王^{おう}に^{しょう}勝^り利^りせよ!

ノプロプス くろ だ けん じ
noprops・黒田研二 / 原作

な み つ み
波摘 / 著

す ず ら ぎ
鈴羅木かりん / イラスト

優助

北部小学校の五年生。

レイカとは別のクラスだが、幼なじみなので仲が良い。サツカークラブに入っているが、オカルト調査クラブのメンバーとしても活動している。パラサイトバグが体内にいないにもかかわらず、青鬼化できる特殊な体質も持っている。

レイカ

北部小学校の五年生。オカルト調査クラブ部長。学校一の美少女だが、オカルト好きで変わり者のため、友だちは少ない。オカルトのことになると周りが見えなくなりがちで、よく幼なじみの優助を巻きこんでいる。

スズナ

北部小学校の四年生。オカルト調査クラブのメンバー。夜の学校で青鬼から逃げるためにレイカたちと行動を共にし、オカルト調査クラブに入ることを決意。レイカになついている。





魔尾町現悩(ゲンノウ)——
オカルトを中心に研究している
民俗学者。青鬼に強い関心を抱い
ており、夏休み明けから北部小学
校・オカルト調査クラブの顧問と
なった。



たまちゃん——
ひとだまのような青い炎を放ち、
宙に浮かぶ。レイカたちに協力的
だが、その不思議な力を使うた
めには、大きな代償を支払う必
要がある。



知香——
二十年前、家族でまほろば遊園
地を訪れた際に事件に巻きこま
れ、青鬼の《王種》となった少年。
二十年間、「地下の王」として遊
園地の地下で孤独に過ごしてい
た。今はレイカたちと協力関係
にある。



ひろし
北部小学校の五年生。この夏、様々な場所で青鬼に遭遇し、そこで得た情報の一部をレイカに教えた。

ソル
青鬼の《王種》の少女。周囲の青鬼を思いのままに操る力を持つため、「兵隊の王」と呼ばれている。特徴的な四体の青鬼を従えている。とある事件でレイカを連れ去り、シヨッピングモールで数日間一緒に過ごしたことをきっかけに、レイカと友だちになった。



クロさん
レイカたちがまぼろば遊園地を調査している最中に出会った男性。青鬼に詳しいが、危険人物のようだ。



遠夢未成
オカルト研究者としての顔を持ちながら、青鬼の《王種》でもある大人の女性。幻を自由に操る「幻覚の王」として、碧奥グランドホテルで青鬼調査クラブメンバーと衝突したが、自身の間違いに気づき心を入れ替えた。ゲンノウさんと同じ大学の出身で、ゲンノウさんの親友。




青鬼

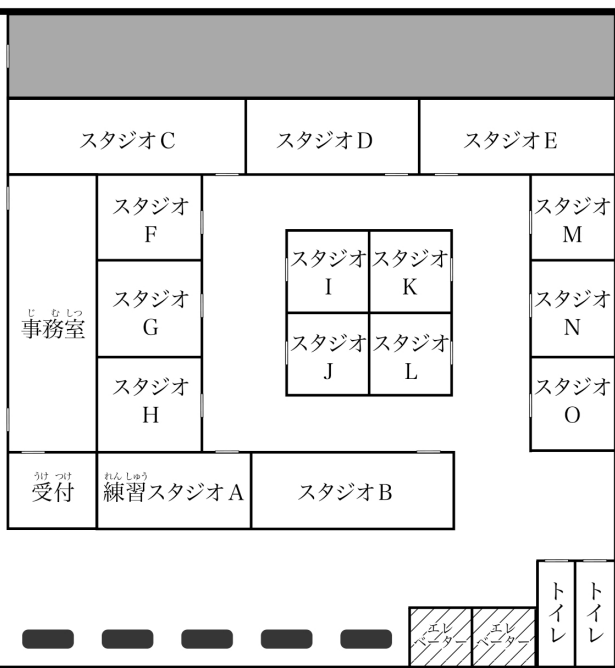
あおおに

調査 クラブス

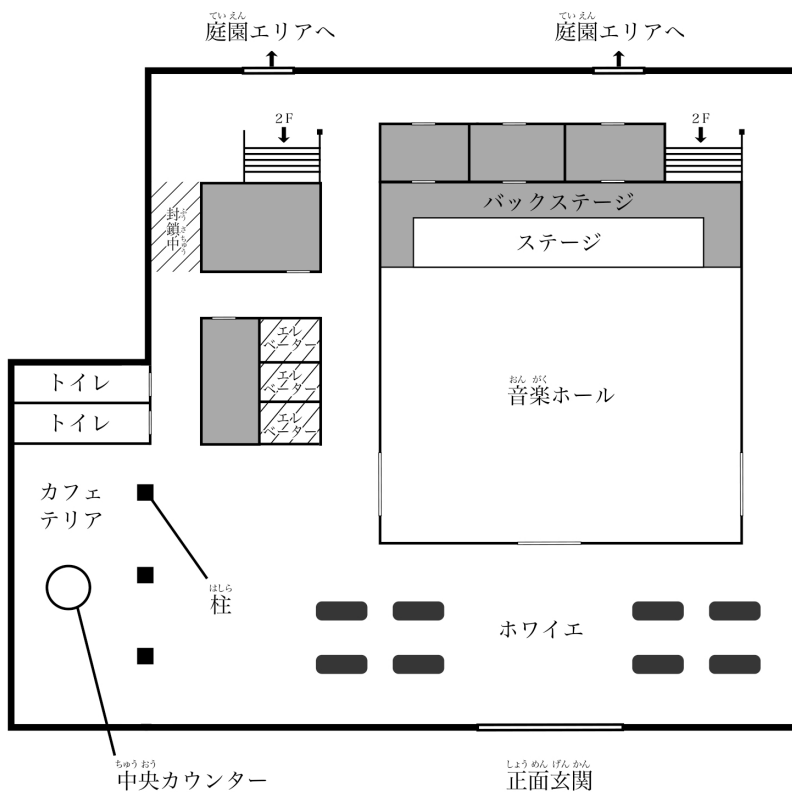
| | |
|-----------------|-----|
| 碧奥芸術劇場の見取り図 | 006 |
| 1 調査クラブのお見舞い | 011 |
| 2 未成さんの仮説 | 024 |
| 3 《玉種》たち | 041 |
| 4 からっぽの青鬼 | 055 |
| 5 スズナちゃんの作戦 | 073 |
| 6 青鬼の包囲網 | 095 |
| 7 玉座と鮮血 | 110 |
| 8 最終手段 | 128 |
| 9 『破壊の王』 | 149 |
| 10 終幕 | 171 |
| 青鬼調査レポート | 180 |
| 碧奥芸術劇場の見取り図 その2 | 182 |

へき お げいじゆつけきじょう
碧奥芸術劇場の ^{み と ず}見取り図

未確認エリア 封鎖中エリア
ソファ



1Fフロア





み かく にん
……未確認エリア

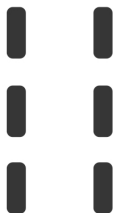


ふう さ ちゆう
……封鎖中エリア

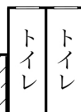
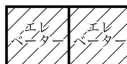


……ソファ

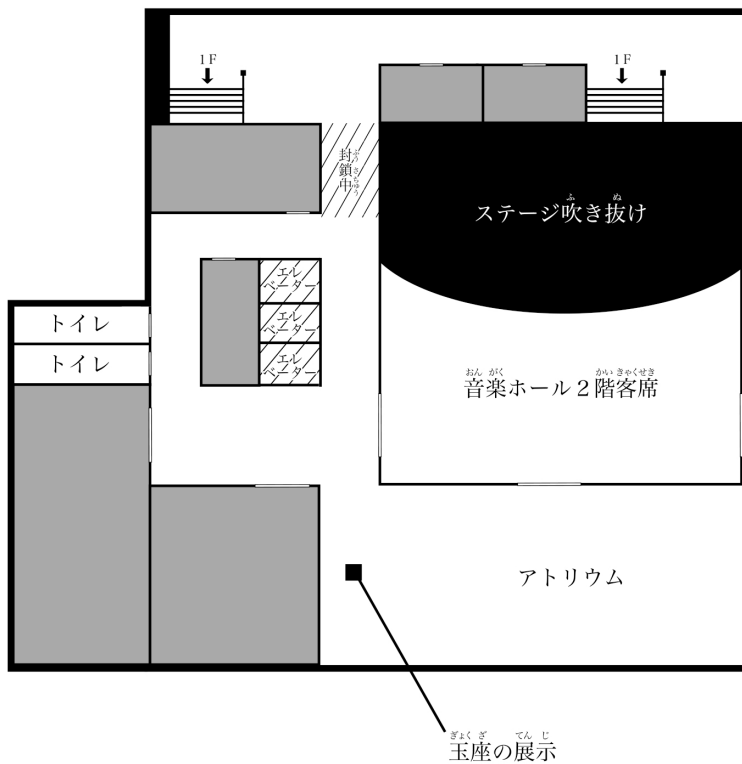
きゆうけい
休憩スペース



げき じゆう
劇場ホール



2Fフロア



あらすじ

自分たちが通う北部小学校に怪物が現れたことや、その後巻き起こった様々な事件をきっかけに、オカルト調査クラブで怪物——「青鬼」について調べ、「倒す」ことを決意したレイカ。碧奥グランドホテルでは青鬼化した遠夢未成と戦い、問題を解決することができたものの、レイカは入院することになってしまふ。そこで、今回は調査クラブのメンバーである幼なじみの優助、後輩のスズナ、顧問でオカルト民俗学者のゲンノウさん、ひとだまのような姿のたまちゃん、《王種》の知香に、碧奥芸術劇場の調査を任せることにしたのだが……。

ブルースター

十年前、隕石として宇宙から飛来し、碧奥町を中心とするあちこちに今も散らばっている。見た目は星型の入れ物のようになっていることから、それが危険なものだと知らずに所持している人間もいるようだ。中にはパラサイトバグが入っている。

パラサイトバグ

ブルースターの中に入っているイナゴのような見た目の虫。死んだように見えても、生きていることがある。パラサイトバグを体内に取りこんだ人間や動物は、青鬼になってしまう。青鬼化した人間は凶暴な性格になることが多いが、まれに自分の意思を保ちながら、上手く青鬼の力を使うことができる人間もいる。

《王種》

複数の青鬼に命令を下して操ることができると、青鬼を束ねる《王》となる力を持った特別な青鬼。現在確認されている《王種》は、とてつもない巨体を持ち『地下の王』と呼ばれていた青鬼、四体の青鬼を自在に操り『兵隊の王』と呼ばれているソル、ソルを裏で助けていた『幻覚の王』の未成。知香は「優助も《王種》だ」と考えているようだが、真偽は不明。

1 調査クラブのお見舞い

じゅうがついつか
十月五日。

碧奥市内にある大型病院。その五階の入院患者用の個室で、わたしは小さくため息をついていた。ベッドの上で身体を起こして、そばにある窓から外をながめる。

そこから見える光景にも飽きてしまった。

「……退屈だわ」

つぶやいたひとり言が部屋の中に響く。

大部屋であれば、もう少ししぎやかだったかもしれないが、あいにく個室しか空いていないということで、わたしはたった一人、この部屋で三日間も過ごしていた。

三日前、わたしは調査クラブは碧奥グランドホテルで、『幻覚の王』であり、ゲンノウさんの親友でもある遠夢未成さんと戦って勝利した。

しかし、無傷で勝てたわけではない。

たまちゃんの力を借りたわたしは、エネルギーを多く失ったことで意識をなくした。

そしてゲンノウさんに抱えられて、ホテルの前に呼んだ救急車へと乗せられ、この病院まで運ばれたのだ。

意識を取り戻したのはその数時間後のこと。

気づいた時には病院のベッドに寝かされていた。

お母さんがすぐくあわてた様子で病院まで飛んできて、それまで付き添ってくれていたゲンノウさんと何か話しているのが聞こえた。

ホテルで実際に起きたことをお母さんに話すわけにはいかない。

仮に正直に話したとしても、「ホテルで青鬼や未成さんと戦っていた」なんて信じてもらえないだろう。

結局、ゲンノウさんは『レイカ君はオカルト関係者が集まるパーティーにどうしても行きたくて、体調不良を隠して参加した。パーティーが終わったと同時に、限界が来て倒れてしまった』という作り話でお母さんに納得してもらったらしい。

お母さんはわたしのことを心配しながら怒ってもいて、入院の翌日、わたしが少し回復したところで、しばらくの「オカルト禁止」を言い渡してきた。

今回、お母さんやお父さんにはたくさん心配をかけてしまった。オカルト禁止と知られても仕

方がない。

だからわたしは逆らうことなく、あきらめに近い心境で従うことにした。

病室にはオカルト本を一冊も持ちこまず、青鬼の調査レポートを書くこともない。

それは両親が望んだ姿であり、わたしにとつてはどこまでも退屈なものだった。正直、オカルトのない生活がここまでつまらないとは思っていなかった。

お母さんによる「オカルト禁止」がいつまで続くかはわからない。

もしかしたら、このまますつとオカルトと関わらないでほしい、と思っているのかもしれない。唐突に、病室のドアがノックされた。

わたしが「どうぞ」と返事をする、がらりとドアがスライドして開かれる。

「——体調はどうだ？ レイカ」

よく知った声とともに、いくつかの足音が部屋の中に入ってきた。

「もうだいたい良くなったわ。今回はさすがに無茶しすぎたわね」

わたしは声の主に対し、苦笑混じりに言葉を返す。

「ごめんな。俺たち、いつもレイカに頼ってばかりで」

そう言っって複雑そうな表情でベッドの横に立ったのは優助だった。

その後ろには心配そうなスズナちゃん、知香くんと真顔のゲンノウさんもいる。ふと窓の外を見ると、何かがふわりと浮かんでいるのが見えた。それは青い炎のよう。ひとだまのたまちゃんだ。

どうやら調査クラブのメンバー勢ぞろいでお見舞いに来てくれたらしい。

知香君は窓際に近寄っていくと、少しだけ窓を開け、たまちゃんを病室にまねき入れる。病室に入ってきたたまちゃんはお礼を告げるように、知香くんの周囲をぐるりと一度回ってか

ら、わたしの手の中に飛びこんできた。

わたしを見上げるたまちゃんのまん丸の瞳は、他のみんなと同じく心配そうだ。

「……また、レイカちゃんに無理をさせてしまいました」

スズナちゃんが暗い声色でうつむいてつぶやく。わたしはたまちゃんをなでながら、なるべく明るい笑顔を作った。

「スズナちゃんは何も悪くないわ。倒れたのは、わたし自身の責任だから」

「でも……っ」

バツと大きく顔を上げたスズナちゃんは、しかし言葉を続けることなく、きゅつと口を結んだ。ここで食い下がっても、わたしを困らせるだけだと思っただろう。



わたしは手を伸ばして、ベッドのわきに立っていたスズナちゃんの手をそつとにぎった。

スズナちゃんの優しい想いはじゅうぶん伝わっている。それでじゅうぶんだ。

「レイカ君の母親にはどうにか納得してもらったが、まさかレイカ君に『オカルト禁止』を言い渡すとは想定外だったよ。私だったら耐えられそうにない」

ゲンノウさんは同情するようにそう言っつて病室の中を見回す。

わたしのベッドのそばには、小学生向けのファンタジー文庫本が何冊か積まれていた。暇つぶしに、とお母さんが置いていったものだ。

その中にオカルト本が一冊もまぎれていないことを確認し、ゲンノウさんは小さく息をつ

く。

「未成の件は本来、私が一人で解決すべき問題だった。巻きこんですまなかつたね、レイカ君」

「そういえば、あれから碧奥グランドホテルはどうになりましたか？ 未成さんは？」

入院騒ぎのせいで、事件のその後を聞きそびれていたことを思い出す。

「未成はレイカ君の一撃で、すっかり目を覚ましたようだよ。幻覚にとらわれていた宿泊客やホテルの従業員たちも皆、元通りになった。もつとも幻覚を見ていた間の記憶はあいまいなようだ
つたが」

わたしはその報告を聞いて、ほつと胸をなでおろす。

「……今の未成はレイカ君を倒れさせてしまったことを後悔している。未成のホテルでの行いを許してやってほしいとまでは言えないが——」

「わたしは未成さんを嫌ってはいないですよ」

複雑な表情を浮かべるゲンノウさんに、わたしは正直に答えた。

「未成さんは『親友と気持ちがあつた違って、焼きもちを焼いた』だけ。それが原因でわたしたちと戦うことにはなりましたけど、本当の悪人じやないってわかっていますから」

わたしの返答に、ゲンノウさんはやわらかな笑みを浮かべた。

「レイカ君は優しいね。君が一番の被害者だというのに」

「いいんです。ゲンノウさんと未成さんが再び仲良くできるようになったのなら、戦ったかいはありますから」

「ありがとう。未成はレイカ君に直接謝罪したがっていたよ。そのうちまた彼女に会ってもらえるかい？」

「ええ、もちろんです」

未成さんについての話題が一段落ついたタイミングで、知香君がひじを使って、ゲンノウさんのことを横からトンと軽く叩いた。

「ゲンノウ。そろそろ時間だ。レイカに例の件を伝えないと」

「……そうだった。レイカ君、今日はホテルの件とは別に、報告しておかないといけないことがあるのだよ」

知香君にうながされたゲンノウさんは、真剣な表情になって切り出す。

他の調査クラブのみんなもピリツとした緊張感に包まれた。

わたしの知らないところで何か起きたようだ。

気を引き締めて、ゲンノウさんの言葉の続きを待つ。

「実は碧奥市内にある碧奥芸術劇場の周辺でブルーベリー色の巨人を見た、という目撃情報複数あつてね。芸術劇場の館長からも私に相談があつたんだ」

「ブルーベリー色の巨人……」

その怪物には心当たりしかない。

「レイカくんが今、想像したであろう存在で間違いないだろう。——青鬼だ」

青鬼の話題だというのに、ゲンノウさんの表情はいつもよりも固い。

その理由は知香くんが言葉を引き継いで説明してくれる。

「今回の件が厄介なのは、街中で青鬼が目撃されている点だ。一般人がいつ青鬼に襲われてもおかしくない」

最近のゲンノウさんは、自分以外の人間がオカルトによつて傷つけられることを良しとしない。そのため今回の状況はあまり喜べないようだ。

知香君は真面目な表情で続ける。

「このまま放つておけば、大変なことになる。だから今日このあと、調査クラブは緊急で状況確認のための調査を行うことにした。すまないが——レイカはここでボクたちの帰りを待っていてくれ」

わたし抜きでの青鬼調査。

その決定はシヨックだった。胸がズキッと痛む。

優助が一步前に出て、こちらをまつすぐ見つめる。

「本当はレイカを置いていきたくない。俺はレイカがいてこそそのオカルト調査クラブだと思ってる」

わたしの気持ちを察しているのだろう。優助は辛そうに顔をしかめて続ける。

「でも誰かが青鬼に襲われるのを見過ごすわけにもいかない。だろ？」

優助の言う通りだ。わたしが退院し、お母さんの『オカルト禁止』が解除されるまで待つてい

たら、いつ調査に向かえるかわからない。

優助と知香君、そしてたまちゃんがいれば、通常の青鬼を倒すことは難しくないのだ。

わたしがいなくても、青鬼調査は行える。

「うん、そうね」

わたしは苦い思いを飲みこんでそう言った。

優助は優しく笑って言う。

「調査の間もスマホで定期的に連絡を入れるよ。レイカが心配しなくて済むように」

そうして、オカルト調査クラブのみんなは碧奥芸術劇場へと向かった。

取り残されたわたしは不安な気持ちを抱えたまま、その後ろ姿を見送ることしかできなかつた。

十七時半。窓の外はもうかなり暗い。

優助たちが芸術劇場へ調査に向かつてから一時間半が経過していた。

わたしはスマホの画面をじつと見つめる。

優助は病院を出てからしばらくの間、約束通り定期連絡を入れてくれていた。

『今からバスに乗る』、『碧奥芸術劇場の近くのバス停に着いた』、『芸術劇場の前まで来た』と、こまめにメッセージが送られてきて、わたしはそのたびにスマホを開いて確認した。

しかし。

『これから調査を始める』。

そのメッセージが送られてきてから——優助からの連絡が一切なくなつた。

心配に思つてこちらからメッセージを送つても反応がない。

優助だけじゃない。一緒にいるはずのゲンノウさんのスマホにも連絡を入れたが、返信はなか

った。

どちらもわたしが送ったメッセージを開いていないようで、『既読』のマークはついていない。今回は廃墟のような場所を調査しているわけじゃないので、圏外という可能性は低かった。調査に集中しているだけならいいが、どうしてもいやな想像が頭をよぎる。

——それは優助たちが青鬼に襲われて動けなくなっている光景だ。

誰かから連絡がないかとスマホを眺め続けているうちに、さらに三十分が過ぎていった。おかしい。わたしの不安はどんどん大きくなっている。

やつぱり無理にでもついていくべきだった。調査クラブのみんながどういう状況に置かれているのかわからないまま、ただベッドで待つのは精神的にきつい。

そんなふうには苦しい表情を浮かべた時だ。

いきなり手元のスマホがふるえた。

画面には優助の名前が表示されている。

メッセージではなく、音声通話の呼び出しだった。わたしはすぐに応答ボタンを押す。

「もしもし、優助!」

思った以上に大きな声が出てしまった。しかし、優助から反応はない。

「……どうしたの？」

声こえが出だせないような状況じょうきょうなのかもしれない。わたしは小聲こごえで質問しつもんを重ねかさるが、やはり優助ゆうすけからの返事へんじはない。

よく耳みみをすますと、全力ぜんりきで走はしっているような足音あしおとと息いきづかいが聞きこえた。

『……はあはあ。やつとつながつた』

ようやく優助ゆうすけの声こえがした。

「優助ゆうすけ、無事ぶじなの？」

わたしは静しずかに問といかける。またしばらく無言むごんが続つづいた。

どうやら優助ゆうすけはスマホスマホを手てに持もって走はしっているらしい。スピーカーホンスピーカーホンにしている様子ようすもないので、おそらくわたしわたしの声こえは届とどいていない。

『碧奥へきおく芸術げいじゆ劇場げきやうの前まえに着ついたら、誰だれもいないのに入いり口ぐちの扉かどが開ひらいてて……ゲンノウさんが館長かんとちやうさんに電話でんわで確認かくんしたんだ。そしたら「泥棒どろぼうじゃないか確たしかめてくれ」つて頼たのまれて、建物たてものの中なかに入はいることになつて……でも、もつと警戒けいがいするべきだった……ごめんな、レイカ。こんなこと言い

うなんて、情なさけないけど』

一いっ方ぱう的てきな優助ゆうすけの言葉ことばと激はげしい呼こ吸きゅう音おんが届とどく。

『やっぱレイカがいないと、俺たちは——』

優助ゆうすけの声をかき消けすように、人間にんげんのものではない叫さけび声こえが聞きこえた。それはよく知しっている、怪物かいぶつのもの。

——ぶおおおおおおおおおっ!!

その太ふとい叫さけび声こえを最さい後ごに、優助ゆうすけからの通話つうわはぶつと切きれてしまった。